

画され、車両と列車で南支の奥地から北へ北へと移動を開始、八月十日天津に到着直後に終戦を迎えたのであった。

終戦後、中国軍の指示に従い盧溝橋の書備をしたりして昭和二十年の十二月内地に復員し、懐かしい妻子のもとに帰郷することが出来た。

我れ驚兵団で戦へり

東京都 清水 渡

私は山梨県生れです、兵庫県西宮市に移籍しました関係で驚兵団に入隊しました。入隊前には、東京在住の親戚の紹介で洋服屋に徒弟制度の年季奉公に入り、一人前の洋服仕立て職人になりました。が、当時は狭い日本より、大陸に新天地を求めて進出する若者が多く、私も青雲の志を抱いて単身で「一旗挙げてやる」の心意気に燃えて神戸の港より大連を目指して船出しました。

大連でロシア人の「ギョルミ」という男と知り合いになり、良い職業を世話してやるといわれ、雑貨商社の外交員になりました。満州鉄道沿線の都市を廻って販売しました。これが驚くほど良い商売で（雑貨物や書籍等）大変多額の金を手に入れました。しかしご存知のように、大陸は雨季が少なく空気が乾燥し、その上に砂漠からの黄砂（塵）が飛来します。私はそのために、身体（咽喉）を痛めて調子が悪くなり、僅か四か月で内地に引き上げて来ました。

大阪の東野田や桜宮の洋服屋にて職人（東京仕込）として腕を発揮しました。その後西宮の甲子園の西の津度の知人の家の二階を借りて、自営で洋服屋を開きました。戦争が激しくなり出したので、時代に即応した技術を身に付ける必要を感じ、尼崎の職業訓練所へ入所（第二期生）、工作科にて三か月勉強を行いました。

丁度昭和十七年一月四日に徴用令が来て、大阪桜宮の日立造船所に入所させられました。同所の各職種は番号にて分類していました。技術者は三千番台で私は

その三千番台でした。技術者以外は四千番台以降でした。私は仕上技術者として勤務しました。

一番最初にした仕事は「図南丸」でした。甲板の上立って下を見ると足が自然にすくんで、身振るいしました。ビルディングの七階位の高さでした。勤務者も多く、機械部門に一万五千人、造船部門にも一万五千人合計三万人が毎日働いていました。現在の造船所とは、まるで異なり、ドックに入れて陸上で行う造船方式でなく、水に浮いたままの船の作業は大変でした。

内容的には優遇され食事も副食も支給され、一か月皆勤すれば褒賞として清酒一升が貰えました。一般社会ではあの当時、酒一升というと、中々手に入らなかった大変な貴い物でした。当初一か月間は社宅の寮生活でした。

播州や但馬・丹波地方からも多くの人が徴用されて来ました。私は家が西宮ですから「君は家から通勤せよ」といわれました。家からは直線で大阪湾の向こうに日立造船が見えています。電車通勤では、グルリと湾を大きく廻り道をしますから大変でした。

勤務時間は朝八時から夕方五時です。残業が毎日二時間はありません。また時には新造船の試運転で淡路島の方まで航行しました。その時は泊まり込みになります。作業は楽なもので、機関の油差し程度のことでした。海軍関係の艦艇では、海防艦や駆潜艇等の小型軍艦の造船でした。他に食料輸送の船で五百トン位でしたが二万人分の食料を積み込めるんだそうです。六千トン級の油輸送のタンカーが花形造船で、日本のタンカー造船技術は世界一でアメリカやドイツより優秀でした。

また上陸用舟艇も一度に七十隻も造れる規模でした。時には敵の戦利船も修理しました。給料は一日一円七十三銭の本給に補給金が出ました。日給が高くなると、補給金が少なくなりました。生活には支障なく毎日働いていました。

昭和十七年八月頃に職業整理令がออกมาして、平和産業従事者は軍需産業にかり出されました。この法律でますます一般国民は軍の方針に縛られ、自由がなくなりました。

昭和十八年九月一日、私にも召集令状が来しました。西宮から二十三名が市役所の兵事係に引率されて九月十日、鳥取歩兵第四十七部隊へ入隊しました。その時に身体検査があり、要注意者として十数名が精密検査を受けている最中（六時頃）に大地震（鳥取地震）があり、軍医の指示で安全な所にジット座っておさまるのを待ちました。街では火災など大被害があったそうでした。同日入隊の中にも数名が不合格で即日帰郷せよといわれました。

翌日より初歩的訓練が始まりました。現隊から初年兵受領の下士官が迎えに来ました。夜間、鳥取歩兵第四十七部隊を出発しました（同年兵百名）。営門で衛兵が整列してラッパを吹奏して見送ってくれました。一瞬、身も心も引き締まり「勝ってくるぞと勇ましく」の歌が脳裏を走りました。

下関にて乗船、釜山に上陸して鮮満国境新義州を通り、満支国境山海関を通り北京に着きました。北京からは貨車に乗せられ、石家荘に着きました。

ここでは軍都への配属が決まり、同行の戦友もいく

つかに別れました。私は洪水の部隊へ送られ、重機関銃岸田中隊に入隊、即重機訓練を受けました。数日後、私と外二名の同期生は石家荘に送られましたが病院検査の結果、本隊の歩兵中隊に帰れといわれました。

「重機には力の強い兵隊だけだ」と十一月中旬河北省南部、深県第二大隊第七中隊に配属になりました。現地教育ですから毎日が緊張の連続で、心身共に疲れました。

昭和十九年一月十五日付にて大隊本部勤務を命ぜられました。この時点で中隊内における私的制裁（殴る）である上級者が下級者に対する暴力行為から開放され「ヤレヤレ」でした。

二月十一日払暁、非常呼集が発せられ、安平県の大掃討作戦に初参加しました。氷点下二十五度の寒気の中を突撃につぐ突撃で大勝利をおさめました。三年前に、この安平県で鷲兵団が悲惨な敗け戦さがあったそうです。その仇討が出来たと大隊長始め幹部が喜んでいました。当時北支方面の敵はすべて八路軍でした。二月末より河南作戦のために石家荘に集結しました。

私達歩兵大隊の作業隊は、まるで工兵隊のような任務です。第一線に出て敵前における血路を開く任務です。鉄条網の切断、トーチカの爆破や地雷の探知除去等々で、特に岩山への攀じ登り訓練は厳しく全員が顎を出しました。勿論瓦斯訓練で防毒面着用でした。一か月間物凄く訓練を受けました。戦闘準備完了です。このような作業はすべて穩密裡に行います。いざ戦闘となると後方陣地より砲兵隊（中島山砲隊）が一分間百発の弾丸を発射する。これが四十五門砲列を揃え立て、一度に全門火蓋を切れば見事なものです。三十分間に三千発の弾丸が頭上を唸って敵陣に射ち込まれるのです。黄河北岸八キロ地点の農業地帯に進出してここが兵站基地です。いよいよ出動です。

三月三十日夜、京漢線南下、四月十二日夜一挙に大黄河を渡りました。大鉄橋は長さ三千六百メートルで、中央が鉄道で左右は自動車道路、その外側が歩道です。十三日夜明け時には全軍南岸に集結しました。見渡す限り軍隊という見事なほどの勢揃いでした。すべて穩密行動でしたから敵も気付かなかったのでしょう。敵

の大軍が守備している前方の小高い山が羅王城です。各隊はそれぞれ分散配置に就き、次なる作戦命令待ちでした。私達も天幕を張って出撃準備をしました。

大隊本部の天幕は、寒暖に対応可能な八帷形の立派な天幕です。この頃伝染病予防のために前線用浄水器を使用していました。濁水が瞬時にして清水になる器具です。酒樽を二つ合わせたような物で片方から入れるともう一方の出口から清水が出て来ます。便利な品物ですが、少し時間がかかるのです。一番簡単なのは飯盒で煮沸することでした。この度の河南大作戦が四度目だそうです。参加部隊は兵員二十万人、軍旗十七旒とのことでした。この付近での戦闘で過去に大打撃を受けたことがあったから、大変慎重な作戦でした。

私達特別攻撃隊は、全員髪と爪とを封筒に入れ、氏名を記して残置しました。その夜大隊長が全員に「お前達の生命は、俺が預かる、今夜限りだと思え」といわれて、天皇陛下より御下賜の酒とタバコを頂戴しました。そして全員東方（日本）に向かって別れを告げました。大隊長は責任の重大さに涙を流しておられま

した。本場に立派な軍人でした。

昭和十九年四月十九日午前四時三十分、黎明を期して砲兵陣地よりの大砲初弾一発によって攻撃の火蓋が切って落とされました。砲弾が頭上を唸って飛んで行く。敵陣からも砲撃がはじまり、我が隊も岩山に登っていたら、私の眼前に落ちて来た者がいます。顔の無い兵士でした。二番目には右足膝から下が飛んで来ました。私の第三分隊特攻隊は約六分遅れて大隊長や指揮班の攻撃進路を作るために匍匐前進したが、まだ夜は明け切らず、その上に泥埃りで前方は何も見えない中を少し左寄りの高地へと登って行きました。後方で兵長と軍曹が何か言っているが、わたしは前進した。鉄条網を五〜六本切断して深い塹壕に飛び込みました。後から軍曹と兵長も飛び込んで来ました。戦況がどのようなになっているのか不明のまま一呼吸していませんと、砲撃は終わって、銃声も途絶えました。

約二十分後に前方高地に日章旗が翻っていました。我にかえって見渡せば、その場所から山上にかけて敵の死体の山でした。さながら地獄絵図のようでした。

我が三分隊の左方地域で第六中隊は全滅しました。幸いにも三分隊は全員無事でした。四月二十三日の夜襲戦で第七中隊は大打撃を受け、中隊長・小隊長以下多数の犠牲者が出て全滅状態でした。後刻判明しましたが、この鉢巻山の攻防戦では、この山頂は古い城で周囲を大きな石で作っており、その石を登って来る日本軍の上に落としてきたので大変苦勞し犠牲者が多かったのです。

戦況我れに利あらず、二十三日午前二時半頃、白樺の大隊長と特攻三分隊の十二名は急遽下山し、山麓にて大隊長と私は二人で同じ天幕を冠って約二時間程眠りました。四時頃黄河の東方の空が少し明るくなり、谷間の中国人の家で水を飲んで貰い、焚火で暖を取って、ヤレヤレと一息ついた。そこに第五中隊長が当番も連れず単身で来られ、大隊長に「昨日より飲まず食わずでした」と水を飲み、ショウビン（小麦粉の焼いたもの）を一つ食って、これで助かったと大笑いでした。

第五中隊は夜襲の時、一時全員不明でした。鉢巻山

も我が軍の猛攻で陥落し、二日後に山頂に立ちました。日本軍の攻撃した北面は急峻な岩肌で、南面は山上近くの城内やその下方は穏やかな段々畑でした。私は南面から攻撃した方が犠牲が少なかったのではなからうかと思いました。

城内には、日本企業のセメントの袋が多量に積み重ねてあった。このセメントで大きな貯水槽やトーチカなど陣地構築したのでらう。大企業は戦争成金で、一般国民は赤紙一枚で死の淵に臨むのだ。

四月二十八日第二大隊は、光兵団（第三七師団）や他部隊と、大近店（仮称）に集結し、洛陽の西南、林城を左手に遠望しながら迂回して西安との中間の要衝の嵩県を目指して進軍しました。第一大隊の洛陽攻撃は四月二十九日だそうです。五月十四日午後六時、渡河に失敗して引き返しました。翌十五日早朝、小雨の降る中を美しい流れの伊水河を渡りました。少し下流には、かの有名な竜門街があり（河の流れ登龍門）、我が分隊の愛馬「河南丸」も永い行軍にても毛並も色艶が悪くなり苦しかったと思う。

同日十二時無事嵩県に入城、洛陽攻撃に向かった。第一大隊は多大な被害を受けたと、後で生存者より聞いた。また嵩県城内にも中央軍の死体が数多く放置されて驚きました。五月二十二日西安に向かって進軍を開始したが、八十キロ地点まで来ると豪雨で道路はぬかるみ、行軍出来ず、引き返すことになる。六月八日再度西安に進軍、関帝廟峠は登り下り八キロです。夜、小さな村にて休憩中、にわか雷鳴が轟き、稲妻が走り、これでは一雨来るぞといっていたら、敵がチェコ機銃を乱射して来た。「銃弾より雨の方が良いのに」と誰かが叫んでいたが、思わぬ苦戦となりました。何ぶん敵は地の利を得ており、進んではさがり、出て来ては引き込む。

このような状況では、私達兵隊が考えても遠い西安までは到底進軍出来ぬと思いました。空軍による制空権でも確保していましたが出来得たかもわかりませんが、日の丸の飛行機は一機も見ることがありません。戦傷者の一名もなくて嵩県へ逃げて帰りました。

六月二十六日我が軍の一大基地である嵩県北方台地

に敵の大軍が現われました。この敵は洛陽方面で日本軍に手痛い打撃を受けて逃げて帰る中央軍です。半ば無茶苦茶に突進して来ます（まるで手負いの猪のよう）。上官は「三〇四時間で敵は逃げて終了だ」といいましたが三日間も相対峙して我が軍の状況を見守っています。友軍陣地も食糧が乏しくなり、米も、カンパン、副食、飲料水まで後僅かです。七月一日夜九時、私は分哨勤務で立哨中、敵に見付けられて狙撃され、一発の銃弾が左耳を（チュッ）と掠めて飛んだ。第二弾を手測して、その場に伏せて夜空を透して見たが敵影を見とめず、息を殺して匍匐で警戒しつつ分哨に連絡を取りました（あの弾が十センチ右に来ていたら、私は顔面から後頭部へ貫通され即死だった）。

二日午後十二時十分頃、真黄色な麦畑の中で陣頭に立って戦闘指揮中の重機関銃第二大隊長の喉頭に敵弾が貫通し血飛沫を上げて倒れられ名譽の最後を遂げられました。隊長は立派な大人格者でした。誠に残念なことでした。キョウト村の戦は、第二大隊としては最大の戦でした。

三日七時頃嵩県東方三キロ地点の谷間の小部落に移動して大休止を行い、昼食準備のために小川に水汲みに下りた時、敵のチェコ機銃に乱射されました。数発の弾丸が至近距離に飛来し「敵襲」と叫びながら引き返して即応戦すべく布陣出撃しました。

かくして昭和二十年三月十三日（西峡口作戦）この山頂付近に一大陣地を構築しました。中国民家から徴発して来た大きな水瓶に飲料水を貯え、地下壕を作つてそこに炊事場を設けた。一時に八百人食可能です。一応持久戦に備える準備が完了しました。周辺の山や峯に各部隊が陣地を構築しました。昨年嵩県入城以来何度出動したでしょうか。また出動命令がきて南を流れる伊水を渡る。雪のチラつく寒い夜でした。ポーバ鎮で弾薬や諸物資を受領して移動しました。パアンという所で隊長に転属命令が来しました。「お前達も東へ向かつての行軍なら良いが、西へ行つては死出の旅になる、気を付けて、頑張れ」と別れの言葉でした。そうです、東は帰国、西は地獄といったものです。

この時第五中隊長も転属され、後任は島根県の女学

校の教頭先生だった将校でした。優しい人で、挨拶も「自分は無理なことはいわぬから、皆身体に充分注意して働け」だった。バマンの夜は雪が烈しく降り、中国人の半地下の家へ入れて頂いて休みました。それから一週間天幕生活をしました。私達三十七名は大隊本部付特攻（斥候）小隊で、時には移動、設営、土建等々種々な作業を行い、また材木の伐採もしました。

林城に到着、ここは東京の竜戦車兵団の地で、少しは休めると思いましたが、戦況が悪く即戦闘準備に掛れとの命令です。出発の号令で暗闇の夜中、雪の降る中を進み、大きな河を胸まで水に入り、銃砲を頭上に載せて渡りました。対岸の方向から敵弾が飛来しました。無我夢中で河岸に上がり、左足が痛いので、岩陰で見ると、砲弾の破片でやられたのか、バックリ皮膚が破れて血が流れています。応急手当をして、夜明けと同時に行軍しました。夕方に第六中隊の同年兵や初年兵五人と大隊本部の負傷した中尉を急造の担架に乗せて、後方林城へ帰りました。負傷も二か月程で完治し、二度目の出発です。

四月二十九日（天長節）のお祝いの品をマーチョ（荷車）に満載し、病院下番（退院者）や元気な兵隊一個小隊で出発しました。緑の広野を前線に急ぎ、伏牛山脈の南を西進し、南陽の街の北を通過し、五月九日鷲兵団司令部のいる小さな部落に到着。ここでお祝品を納め、我が隊のいる前線に行くには小人員の行動は危険なため、輸送部隊と同行せよといわれ、ここに八日間程待機しました。

この時に兵団通信が内地の情報を受信していました、東京が空襲されて焼け野原になっているとか、沖縄戦線の事等を知らされました。また印度からの無線を傍受すると、東京政府は最後だといっています（日本政府といわず東京政府）。このようなニュースを聞いて、必ず勝つと思つた戦争が敗けるとは思えませんでした。が、中国大陸においても制空権は敵の手にあり、地上軍の弾薬物資も欠乏しており、私も心の中に不安な気持ちさが横切りました。

五月末頃によりやく原隊へ追従しました。特攻隊も多数の戦死者を出しまして、生存者は分隊長以下八名

でした。仲の良かった戦友は何処で散華したか不明で、残りの戦友に尋ねても激戦に次ぐ激戦で自分が生きているのが不思議だという始末で、私としては慚愧の念の一語です。敵は西安から爆撃機を二時間で飛ばして来ます、朝から日没まで絶えず第一線を上空から監視し、時にはドラム缶で油を投下して火を放ち、山も畑も丸焼けになります。日本軍は飛行機もなく、対空火器も乏しく、完全に大空は敵の手中にあるのです。我が軍としては夜間行軍のみです。

食糧も不足し自給自足せよで、補給路は完全に遮断され、最後には弾薬の抑制、主食は一人一日一合、それも不足がちです。古いとうもろこしや大豆、小豆から粟から花の咲いた野芹、谷川での魚取りなど、自分の生命は自分で守れました。六月末に兵团命令で第一中隊と第七中隊と大隊本部勤務五名が許昌に向かって出発しました。私は途中より身体の不調を感じていましたが、到着と同時にマラリアが再発して四十度の高熱が三日も続き、その間は何も記憶なしでした。

新独立中隊が編成されました。第一線経験者は私一

人で、中隊長始め幹部は実戦体験の無い人です。隊長命令で八月八日マーチヨに乗って許昌を出発し、燃えるような河南広野を、また前線へ向かいました。

林城に就く前日の十四日午前十時三十分頃、本部よりの騎馬伝令が来て、敗戦を知らされました。部隊は九月中旬霸王城の城外農村地帯に集結。十月中央軍にて武装解除される。洛陽南東三十キロ地点に全軍集結完了。復員を待つ。六か月抑留されました。その期間、本職の洋服屋に戻り、軍服を背広に仕立て直します。

将校服地を裁断して型紙に合わせて作り変えるのです。大変難しい作業で、下手な職人には出来ません。六着の背広が出来上がりました。皆さん喜んで着用されました。三月末に開封から徐州を経由しパンブウ(蛙埠)に着き、長江を渡って鎮江から上海に行きました。数日後乗船、出航して昭和二十一年四月二十九日、山口県仙崎港に上陸しました。船上で復員(解散)式を行った。

復員列車で東京方面に帰ったのは原町田の三浦さん、文京の吉田さんと私の三名だった。下関から広島へと

列車は進み、広島原爆の物凄さも車窓より見る。五月二日妻の実家の栃木県に帰る。出征時の幼児も五歳の腕白坊主になっていたが、私の顔を見て不思議そうな顔をしている。「父ちゃんだよ」恥ずかしそうにしながら近づき抱きついた。

西宮にも行って見ました。一面の焼け野原にバラックが少し建っていた。眼が少し赤くなって痛むので眼科医見て貰うと「マラリアから来ている」と手当をして呉れた。右眼は良くなったが左眼は二度と光を見る事が出来ず現在にいたっています。私は不戦を誓い、心から戦没英霊の御冥福をお祈り申し上げます。合掌

支那事変では北支で戦闘

—戦争末期は内地飛行場大隊—

岩手県 伊藤 藤 徳 二

私は大正五年十二月十五日生れ、旧姓は細川と申しますが、昭和十二年徴集兵で、第一補充兵として、十

三年三月八日、弘前の歩兵第三十一連隊留守隊に入隊したのです。十月末まで教育を受け、一期の検閲は受けて、十一年式の軽機関銃班でした。

昭和十四年二月、第三十六師団、歩兵第二二連隊が新設されました。私は現役兵ではなかったし、そう申しては何ですが真面目にやりましたので、班長にも信頼され、古参兵にも余り叩かれず、二月に一選抜で上等兵に進級することが出来ました。

四月北支へと、神戸港から出発、大沽へ上陸しましたが、連隊長は青砥大佐で、連隊本部は山西省の大原の南方の平遥という所にありました。私は第二大隊の第六中隊に配属され、最初の陣地は五條鎮という所でした、分哨勤務や討伐が任務でしたが、主な敵は共産八路軍で、夜襲して来たのを撃退したり、逆にこちらが討伐作戦に出たりしました。

八路軍はこちらの兵力が少なく弱いと攻めて来る。我が軍が強いと逃げるといふ戦法でした。山の上に敵がいて、「連隊はそれを占領せよ」という命令を受け、第二大隊は五條鎮から山西省南部の潞安へと南下した